



ミオちゃんが危ない！

目次

- | | | | |
|---|------------------------------|------|-----|
| 一 | かえりの会 | いち | ページ |
| 二 | かえり道 | ろく | ページ |
| 三 | ミオちゃんが危ない！ | じゅうに | ページ |
| 四 | 正義のみかた！
「子ども110番のいえ」のおばさん | じゅうご | ページ |
| 五 | おかあさん | じゅうご | ページ |

— かえりの会

ミオちゃんは、このまちの小学校にかよう一年生です。きょうも元気に学校にきて、おべんきょうもうんどうも、いっしょうけんめいがんばりました。おひるのきゅうしょくも、がんばってせんぶたへましました。



「キーン、コーン、カーン、コーン」。かえりの会のはじまりをしらせるチャイムがなりました。さあ、

かえりの会のはじまりです。

先生が、みんなにこんなおはなしをしました。

「このころ、学校のまわりで、しらないおじさんから声をかけられた子がいます。このおじさんはね、『あめ玉をあげるからついておいで』って声をかけてくるんだって。

みんな、学校からかえるときに、このおじさんから、『あめ玉をあげるよ。ついておいで』って声をかけられたらどうするかな？」すると、トモくんが「『いら



気づいたことをかいてみましょう。

ない』っていうよ。ついていけないよ。」と、大きな声でこたえました。「そうだね、しらないおじさんだものね。ぜったいに、ついていっちゃあだめだよね。」と、先生がいました。これを聞いていたサキちゃんが、「でも、そのおじさんが、『おいで、おいで』って、うでをひっぱってくるかもしれないよ。」としばいそうにいいました。するとタツヤくんが、『いやだー!』とか『キヤーッ!』ってさけばいいじゃん。」とこたえました。「そうだね。だまっていたら、つれていかれちゃうものね。大きな声で、さけぶんだよ。そ

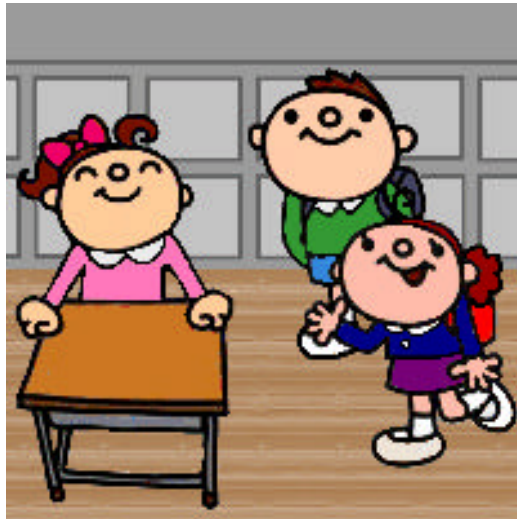


れからね、『キヤーッ!』ってさけぶと、遊んでぶざけているように聞こえるかもしれないから、『ウオーッ!』ってさけぼうね。そうだ、みんなでそろってさけんでみようよ。先生が『いち・に・さん』っていうから、そのあとに、みんなで『ウオーッ!』ってさけんでみて。」と先生がいました。先生が『いち・に・さん』といいました。すると、みんなが大きな声で『ウオーッ!』とさけびました。ミオちゃんも、みんな



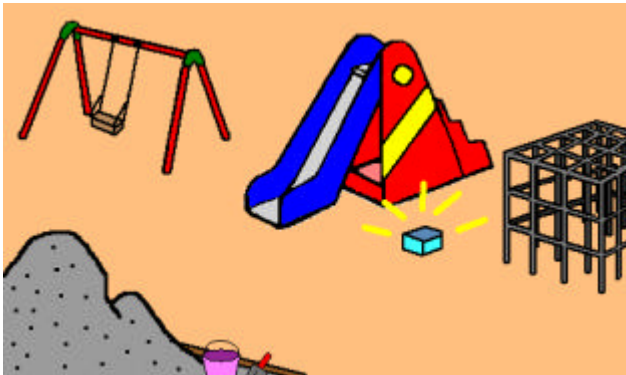
なに負けないくらい大きな声で『ウォーッ!』とさ
げびました。

かえりの会がおわりました。サキちゃんとタツヤ
くんがミオちゃんのそばに来て、「いっしょにかえ
るう。」といいました。サキちゃんとタツヤくんの
おうちでは、ミオちゃんのおうちのすぐちかくにあり
ます。だから三人
は、学校に来ると
きも、学校からお
うちにかえるとき
も、いつもいっし
よです。「うん、い
っしょにかえろ
う。」とミオちゃん
がいました。

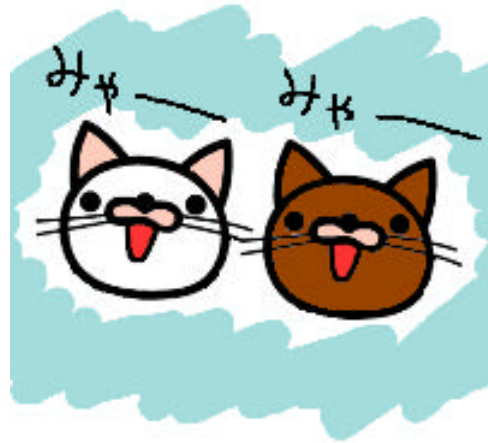


二 かえり道

ミオちゃんは、タツヤくんとサキちゃんといっし
よに学校の門を出ると、い
つもかよう道を歩いておう
ちにむかいました。ミオち
ゃんのおうちの少してまえ
に、小さな公園があります。
この公園には、ブランコや
すべり台、ジャングルジム
や、おすな場があるので、
ミオちゃんは、いつもこの
公園で、おともだちと遊ん
でいました。



三人が公園のまえまで来ると、すべり台のよこに小さな箱がおいてあるのが見えました。タツヤくんが、「なんだろう。見てみよう。」といいながら、箱がおかれているところにもわかって歩き出しました。ミオちゃんとサキちゃんも、タツヤくんのあとをついていきました。三人は、箱にちかづいて、そっと中をのぞいてみました。すると、箱の中には小さな子ねこが二ひき、「みゃー、みゃー」と小さな声でないていました。「一ひきは、ちゃ色の子ねこで、もう一ひきは、まっ白な子ねこです。ミオ



ちゃんは、ねこが大好きです。ミオちゃんのおうちにもテンちゃんという名前のまっ白な子ねこがいます。サキちゃんが、「わー、かわいいね。」といいながらニコニコとわらいました。タツヤくんが「うん、ほんとうにかわいいね。でも、なんでこんなところにいるのかなあ。」と、すてられちゃったのかなあ。」と、しんぱいそうにいいました。すると、サキちゃんが、「だじょうぶだよ。こんなにかわいいんだもん。きつとだれかが、もらっ



てくれるよ。」といいました。「そうだね、だいじょうぶだよね。」と、タツヤくんがいました。「より道みちをしていると、おかあさんにしかられちゃうから、早くかえろうよ。ここに子ねこねがいることは、おうちにかえってから、おかあさんにはなしてみよう。なんとかしてくれるかもしれないから……。」と、サキちゃんがいました。タツヤくんが、あんしんしたように「うん。」とうなずきました。でも、ミオちゃんは子ねこねたちのことが、かわいそうでたまりません。もう少しすこしだけ、



そばにいてあげたいとおもいました。「わたし、もうちよっとここにいるから、タツヤくとサキちゃんは先まにかえって。」と、ミオちゃんがいました。「でも、おかあさんが『ひとりでかえってきちゃだめ』って言ってたよ。ひとりでかえると、わるい人ひとにつれていかれちゃうって。それに、『あめ玉たまごをあげる』って声こえをかけるおじさんが来たらどうするの?」と、サキちゃんがしんばいそうにいました。「だいじょうぶ。わたしのおうちは、すぐそこだし。それに、もしそのお



じさんにつれていかれそうになったら、「ウォーッ！」ってさげばいいんでしょ？」とミオちゃんがいいました。タツヤくんもサキちゃんも、ミオちゃんひとりを公園こうえんにのこしてかえるのが、とてもしんばいでした。だから、「ねえ、いっしょにかえろうよ。」と、なんどもなんどもミオちゃんにいいました。でも、ミオちゃんは、「だいじょうぶ。」といつて、子ねここたちのそばをはなれようとしません。タツヤくんとサキちゃんは、しかたなく、ミオちゃんと公園こうえんでわかれて、ふたりだけでおうちにかえりました。



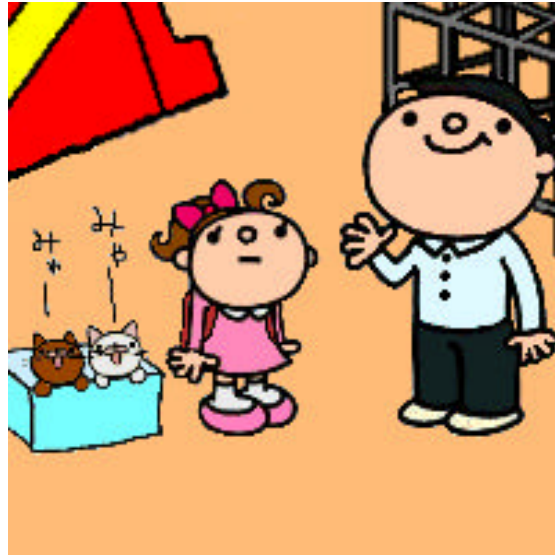
三 ミオちゃんが危ない！

ミオちゃんは、箱はこのそばにすわると、「君きみたちは、どこから来たの？」と、子ねここたちのあたまをやさしくなでながら聞ききました。子ねここたちは、あいかわらず「みゃー、みゃー」と小ちいさな声こゑでなっています。ふと気きがつくと、箱はこのよこに、おとなの人の大きな足あしが見みえました。ミオちゃんが顔をかお上げると、そこには、知らないおじさんが立たっていました。おじさんは、ニコニコわらいなが



ら、「おじょうちゃん、なにしているの？」とミオちゃんに聞きました。ミオちゃんは、「学校からかえり道に、この箱を見つけたの。そしたらね、中にね、子ねこが二ひきいたの。なっていたからかわいそうになって、それでね……。」といいながら、子ねこたちの顔を見ました。ミオちゃんは、なんだかとても悲しくなってきました。

おじさんは、とてもやさしそうな顔をしています。ミオちゃん

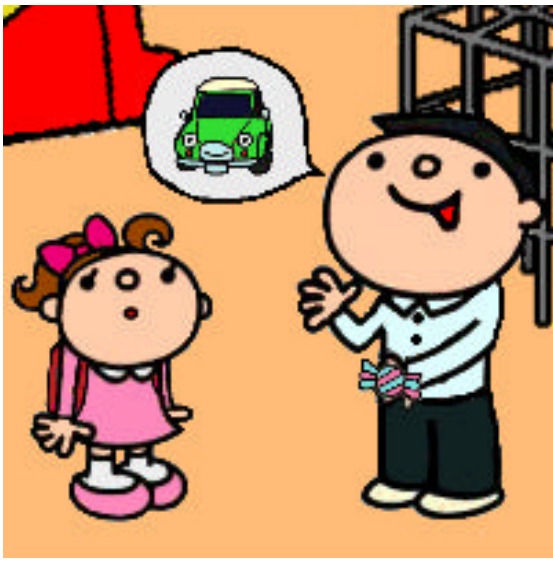


んは、このおじさんなら子ねこたちを助けてくれるかもしれないとおもいました。「ねえ、おじさん。子ねこたちを助けてください。」と、ミオちゃんは、おじさんにおねがいました。おじさんは、「おじょうちゃんはやさしい子だね。ごほうびに、あめ玉をあげよう。」といいながら、スポンのポケットからあめ玉をとり出してミオちゃんにくれました。そして、「このままじゃあ、子ねこたちは死んじゃうかもしれないよ。そうだ、子ねこたちを、もつとあんぜんなと



ころにつれていってあげようよ。おじさんも、いっしょに行つてあげるよ。おじさん車がそこにあるから、いっしょに乗つていこう。「といいました。「でも……。「ミオちゃんは、先生から、「あめ玉をあげるからついておいで」と、子どもに声をかけるおじさんのことや、知らない人にはぜつたいについでいってはいけないといわれていたことをおもいだしたのです。

ミオちゃんは、どうしたらいいかこまって、子



ねこたちの顔を見ていました。すると、おじさんが子ねこたちの入った箱を片方のうでにかかえました。そして、「このままだと、子ねこたちが死んじゃうよ。それでもいいの？おじさんといっしょにくれば、子ねこたちを助けることができるんだよ。さあ、おじさんといっしょに行こう。」といいながら、ミオちゃんのうでを強い力でひっぱってきました。このとき、はじめてミオちゃんは、このおじさんが先生



の話していた、あめ玉をあげるといって子どもをさそうわるいおじさんなのだということに気がつきました。ミオちゃんは、おじさんのことが急にこわくなりまりました。いっしょうけんめいに、おじさんの手をふりほどこうとしましたが、おじさんの力が強くて、どうにもなりません。おじさんは、こわい顔で「おじょうちゃん、おとなしくついてこないとだめだよ。」とミオ



ちゃんをにらみつけました。おじさんが、子ねこたちの入った箱をミオちゃんの足もとに放りなげたので、子ねこたちは、地面に放り出されてしまいました。子ねこたちは、ミオちゃんの顔を見て、しんぱいそうに「みゃー、みゃー」となき続けています。ミオちゃんは、子ねこたちが「みゃー、みゃー」となく姿を見て、先生からいわれたことを思い出しました。「そうだ、『ウォーッ！』って大声でさけばなきや……」でも、こわさでがドキドキして、なかなかおもうように声が出せませ



ん。子ねこたちは、「ミオちゃん、がんばって！」と励ますように、ますます大きな声で「みゃー、みゃー」となき続けていきます。ミオちゃんは、かえりの会でれんしゅうしたように声を出してみようとおもいました。そして、先生の「いち・にの・さん」のあいずで声を出したようにやってみようとおもいました。ミオちゃんは、「いち・にの・さん」と心の中でかぞえてから、おもいきり大きな声で「ウーッ！」とさけびました。すると、おじさんはビックリして、それまでつかんでいたミオちゃんのうでをはなしました。



四 正義のみかた！ 「子ども110番のいえ」のおばさん

公園のむかいに、おかし屋さんがあります。このおかし屋さんには、子どもがこまったり、こわい目にあつたときにかけこむと、助けてくれる「子ども110番のいえ」です。お店の中では、おばさんが、いつもお店番をしています。ミオちゃんの「ウーッ！」というさけび声が、おばさんの耳にとどきました。おばさんが、しんぱい



そんな顔で、お店の中からとび出してきました。ミオちゃんは、勇気を出して、おばさんのところにむかって走り出しました。おじさんが、ミオちゃんのを追いかけてきます。おばさんは、「女の子が、わるい人につれていかれちゃう」とおまい、ミオちゃんを助けようと、あわてて走り出しました。おじさんがミオちゃんに追いつくより、ほんの少し早く、おばさんがミオちゃんを抱きとめました。おばさんは、自分の体のうし



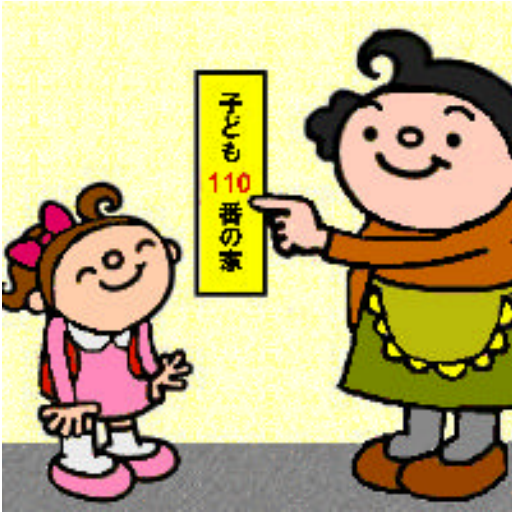
ろにミオちゃんのすがたをかくしました。そして、両手を広げてミオちゃんをかばうようにしました。おばさんが、おじさんにむかって、「この子になんの用ですか!」と、しかりつけるように大きな声で聞きました。ミオちゃんは、おばさんのことを正義のみかただ!とおまい、とてもたのもしく感じました。おじさんは、「道がわからないので、この子に聞いていたんですよ。」といいました。おばさんは、うしろをふり返ると、こわくてふるえているミオちゃんにむかって、「そうなの?このおじさんは、あなたに道を聞いていたの?」と聞き



ました。ミオちゃんは、「ちがうもん！」といい
かったのですが、こわくて声が出せません。ミオ
ちゃんは、声を出すかわりに、首を大きく横にふり
ました。おばさんがおじさんにむかって、「けいさつ
を呼びますよ！」と、どなりつけるように大きな声
でいいました。すると、おじさんは、急にこまったよ
うな顔になり、あわててにげ出しました。おば
さんは、ミオちゃんの肩をやさしく抱いて、お店の中
にミオちゃんをつれていくと、すぐにけいさつ



に110番つうほうしてくれました。そして、おま
わりさんが来るまでのあいだ、お店の中でミオちゃ
んを守ってくれました。まもなくして、おまわりさ
んが、お店にやってきました。ミオちゃんは、おば
さんにむかって「ありとうございました。」とお礼
をいいながら、あたまを下げました。
おばさんが、「このお店はね、『子ども
110番のいえ』なのよ。だから、ミオちゃん
がこまったたり、こわい目にあつたときは、
すぐにとびこんで



おいで。おばさんが、
ぜったいにミオちゃん
を守^{まも}ってあげる！」と
いって、ニッコリわら
いました。ミオちゃん
もニッコリわらって
「ハイ！」と元^{げん}気^きにこ
たえました。「のあと、
おまわりさんがミオち
ゃんをパトカーにのせて、
おうちまで送^{おく}ってくれま
した。



五 おかあさん

ミオちゃんは、おうちにつくとすぐ、公園^{こうえん}でこわ

いおじさんに声^{こゑ}をかけられたことや、大^{おお}きな声^{こゑ}を出^だ
して助けをもとめたこと、子^こども110番^{ひゃくじゅうひん}のいえの
おばさんに助^{たす}けてもらったことなどを、おかあさん
に話^{はな}しました。おかあさんは、「ほんとうに、ぶじ
でよかったね。でも、学^{がっこう}校^{こう}からかえってくるときは、
ぜったいにひとり
でかえってこない
でね。タツヤくん
やサキちゃんとい
っしょにかえって
くるのよ。」とい
って、ミオちゃ
んをやさしく抱^だき
しめました。そし
て、「ミオちゃん、



いまからおかあさんといっしょに、子ね^こたちをむかえにいこうね。」といいました。ミオちゃんのおかげ、テンちゃんが「にゃーん」と、うれしそうになきました。

おわり

作成 平成十七年十二月

静岡県警察本部生活安全企画課

(注)この子ども安全読本は、県警ホームページの「子ども安全情報」のコーナーから出力することができます。